

小笠原 亮



「竹譜詳録」近世中国での写本。乾坤二冊本の表紙



右/乾の巻 見開き。細字楷書の美しさも鑑賞に値する



「竹譜詳録」醉墨齋編 和刻本。
左/表紙題簽 右/見開き

竹譜詳録

雑花園文庫蔵

初夏から伸び出した筍も七月になれば、すっかり成長し、小枝を繁らせ若葉に彩られて美しさを増し七夕の主役を勤める。

さて宝暦六年、大阪醉墨齋村上秀範によって刊行された「竹譜詳録」は、原本は中国の薊丘季によって著作されたものの和刻本である。内容は畫竹譜、すなわちタケを画くためのいろいろの筆法、約束ごとなどが順序立てて詳細に編集されている。例えば、竿、枝、葉、葉のつき方、小枝の出方、あるいは水墨画としての画き方では静かなるとき、微風、疾風、乍雨、久雨など東洋絵画の基礎講座のテキスト的役割をなす文献である。したがって植物学、あるいは園芸的に見れば、参考文献に過ぎないと考えていた。

ところが、あるとき同名の写本を見つけ、手にしたとき、架蔵の本とあまりにも内容の違いを見つけ、喜んで入手した。

写本「竹譜詳録」は著作者は和刻本と同様で元の大徳三年（二二九九）息齋道人薊丘季行述。清細楼竹園なる人の写本、実に美しい楷書文字で首尾一貫書写されている。中国の人ならではの写本の技術である。

内容は、畫竹譜、墨竹譜、竹態譜（こまこまだが和刻本の内容に相当する。ただし図はない）つづいて竹品譜一〓全徳品、竹品譜二〓異形品上、竹品譜三〓異形品下、竹品譜四〓異色品、竹品譜五〓非竹品。以上のうち竹品譜一〜四にはタケの種名、産地、形態、利用筍の食用可否などが、五の非竹品はトウ、シユロチク、カンノンチクなどすべて植物的記述であり「竹譜詳録」の書名にふさわしい。